

【狂愛監禁】二十四時間の媚薬陥落カルテ
く手錠と足枷で拘束された『被験体』の私が、「薬のせい」にして自ら猛毒に堕ちてゆく
サンプル（一部抜粋）

「…ん…」

ピッピッと規則正しく響く機械音と消毒液の匂い。いつの間に眠っていたんだろう。重い瞼を
ゆっくりと開けると薄暗い天井が見えた。

「…？」

起き上がろうとする身体を、ジャラつと重い金属音が引き留めた。

不思議に思いながら自分の手へと視線を移すと、簡単には壊せそうにない手錠がはめられてい
た。肌を刺す金属の冷たさにぶるっと震えながら、自分の身体に目を向けると…私は全裸の状
態だった。

「え…？なに、なんで…？」

反対の手を見ても、頭を持ち上げて自分の足を見ても…四肢全てに太い錠がかけられていた。
「…なにこれ…」

焦って暴れる私に、低く冷たい声が降り注いだ。

「っ！」

慌てて声がした方を見ると、白衣をまとったメガネを掛けた男性が私を見下ろしていた。

「…だれ…ですか…」

整った顔は綺麗なのに、瞳に光がなく恐ろしかった。

「君は昨夜の事を覚えていないのか？」

男性は小さくため息をつきながら、手錠をそつとなぞった。

昨夜…？何があったっけ…。

確か同僚に無理矢理参加させられた合コンでお酒を飲んだ…ような…

でもそこからの記憶が一切ない。思い出せない記憶を遡ろうとすると、頭にズキッと重い痛みが走って顔を歪ませた。

「…やだ…なんでこんな事…」

やめて、コレ外して…服も返して…」

あまりにも冷静な彼を見て、私は涙を我慢しながら必死で訴えた。だけど

「…まずは一本から行こうか。」

と私の訴えを無視するように、小さなぼやきが耳に入った。

「一本…？」

「…そんなに不安そうな顔をしないでいい。大丈夫。どうせ二十四時間後には君は僕なしでは

生きられなくなる。」

口元だけをフツと緩ませ、冷たく私を見下ろす彼に、私は首を横に振った。

「いや、なにをするの…やだ、やめて！」

拒絶などなんの意味もない事くらい、もう理解はしていた。彼に私の言葉は届かないと。それでも拒絶しなければ…と恐怖で頭がいっぱいだった。

「…契約書にサインしたのは君だよ。」

僕専用の被験体一号になると。二十四時間限定で、だけどね。

それだけの時間があれば十分だからね。

今から注射するのは…ただの催淫薬だ。僕の開発した新薬の中で一番効果が弱いものだ。」

「催淫…？なに…それ…やだ、やめて…」

（中略）

注射から十分後、私は身体をビクッと震わせた。なぜか身体の奥底が熱くなってくるような感覚がして、毛布の繊維が乳首の先に触れるだけで、まるで何千もの小さな舌に舐められているように熱かったから。

「っ、あ…」

ざわざわと奥から湧き上がってくる熱にたまらず声をあげ、身体をよじったけど…それが間違っていた。だって身体をよじる度に、乳首が毛布にすれて更なる刺激に身体が熱くなったから。

「やだ、あ……あ……」

頭では早くこの場から逃げたいと思っているのに、身体は次の刺激を求めて乳首を毛布に擦りつけるように身体をもじもじと振っていた。

「先生……あ……やだ、あ……」

時間は二十時二十分。スーッと勝手に耳に涙が垂れてきた。気持ちいい、気持ちよすぎて身体が熱くておかしい。どうにかしてほしい、助けて……そんな感情でごちゃごちゃだった。

「せんせ……佐伯先生……」

ここには私と先生しかない。助けを求められる相手は……彼しかいなかった。小さな声で彼を呼ぶとガチャッとドアの開く音が聞こえた。

「……開始から二十分。想定より良い反応だな。素質があるね。さすが僕が選んだ被験体だ。」
佐伯先生はクスクスと楽しそうに笑いながら私を見下ろし、毛布をそつと剥ぎ取った。

「や……あ……身体が熱いんです……助けて……もうやだ……」

泣きながら訴えると、先生は意地悪く笑った。

「……乳首をこんなに勃たせて……毛布にこすりつけていただろう？
カメラですつと見ていたよ。君がもじもじしている所を。」

佐伯先生はからかうようにそう言うと、私の乳首を指の先でピンッと弾いた。

（中略）

「まだ一回押し上げただけだよ。実験しようか。」

今の君は何回刺激すればいくのか。被験体として良いデータを見せてくれる事を期待しているよ。」

勝手に始められる実験……。私の中で指を動かす度にグチュグチュと淫らな音が部屋に響く。

「二回目。三回目。」

ぐちゅっぐちゅっとカウントと共に刺激され：身体の内側から蜜が溢れ、声が止まらない。

「あああつ、あつ、や、いつちゃう、いつ」

「もう少し我慢しなさい。まだ五回だよ。君は今、よく知りもしない男に、研究者に実験体になされているんだよ。」

無理矢理薬を打たれ、身体で遊ばれているんだ。屈辱的だろう？ここでは君の尊厳も何も存在しない。ただ僕専用のオモチャになり下がっただけ。

ほら、そんな男の愛撫に簡単にいくのかな？もう少し抗いなさい。」

佐伯先生は楽しそうに意地悪な言葉を吐いた。私だっていきたくない。これは薬のせいだ：私が本心からいきたいと思っっているわけではなくて：身体が勝手に反応してしまっているだけなのに：

悔しくていきたくないのに気持ちよくて、唇を噛んで涙を流した。

（中略）

「もつとがんばれ。いきたくないんでしょ？僕にイカされたくないんだよね？」と意地悪く言葉を吐き捨てた。

「いきたく…ないっ、あああっやだ、やだあ…っ

ああ、もお…むり…いっ~~~~~っ

身体をびくんびくんと激しく痙攣させながら…いきたくもないのにイってしまった。

「あ…あ…やだ…あ…」

限界まで我慢させられたからなのか、頭が真っ白になって身体の痙攣が止まらなかった。

「あれ。イっちゃったんだ？」

分かっているくせに、意地悪く事実を突きつけて来るその言葉に、私は精一杯の反撃として唇を噛んで睨んだ。

（中略）

「…これは…薬のせいです…」

屈服はしたくなくて、そんな言い訳を口にした。

「一時間が経ったね。二本目を投与してから、少し休憩しようか」

またさっきの感覚がやってくると思うと、怖かった。

二本目の薬を打たれてから七分、身体がまたドクドクと熱くなり始めた。食事すらも先生の手で与えられ、私の神経は異様な光景に麻痺していく。

「弄ってほしいのは……ここかな」

佐伯先生はお腹を撫で、スーッとクリトリスまで指を滑らせた。

「君を満足させられるのは、僕だ」

私をソファにドサッと押し倒し、じゅるっと激しい音と共にクリトリスを吸われた。一瞬で全身が快楽に支配される。

「次は何回連続でイけるかの実験をしてみようか」

五回、六回……イってもイっても佐伯先生の指と舌は止まらなかった。

「もつとイけるでしょ?」「ほら、いきなさい。」いく度にそう呟かれる。もう無理なのに、身体も頭も限界なのに……限界の先へと強制的に連れて行かれてしまう。

(中略)

「よく眠っていたね。この監禁生活ももう十三時間が経過している。

君の陥落まで残り十二時間だ。今の気分は?」

「……解放……してください……」

昨日と変わらないです。どれだけ身体を支配されても、薬で操られても……心はあなたを想った
りしない……」

半分は自分に言い聞かせる為に、もう半分は先生への挑戦状のように……言葉を紡いだ。

「そう。そうだといひね。」

佐伯先生の表情にまた意地悪な光が戻った。

「面白い事をね。思いついたんだ。」

先生は手袋を装着し、チューブのキャップを外しながら、楽しそうにそう呟いた。

「面白い事……？」

「そう。君が喜びそうな事だよ。」

先にこの薬を塗りこんであげる。話はこの薬の効果が出る一分後だ。」

怖いのに……身体は既に熱くなり始めていた。

(中略)

「ん？嫌なんだろう？そんなに嫌われているなんて、悲しいな。」

僕はただ……君を僕なりの方法で愛しているだけなのに。」

先生は少し悲しそうに私の目を見つめた。まるで……私が悪い事をしたかのような……そんな空気だった。

どんな言葉を口にすればいいのか分からなくて、先生の悲しそうな顔に胸が少しズキとする意味も分からなくて……身体の不完全燃焼さにもモヤモヤして黙り込むしかなかった。

「でも僕は……それでも君の事を愛してるんだ。分かる……？」

……僕はもう君には触れないよ。君が求めて来ない限り。」

先生は悲しそうにそう言つて……引き出しを開けた。

一瞬、引き出しに目を向けた先生の横顔が笑っているように見えたのは……きつと気のせいだよ
ね……

（中略）

先生はニコツとして電マを私に見せつけ、私のお腹の上に電マを置いた。

「え、あ……あッ」

「お腹の上に置いてあげる。直接敏感な場所に当てちゃうとすぐにイっちゃうだろうし。

恥骨を伝つてクリトリスへと振動が伝わっていくだろう？

ね。僕はもう触れないから。安心して壊れてね。」

くすつと笑つた佐伯先生は、獲物を見下ろすような瞳で私を見つめた。

（中略）

「君は与えてもらう事ばかりだな。昨日から君の反応を傍で見続けて、君を愛撫して……僕が何も感じないとも思っているのかな。」

佐伯先生はそう言うと言ふとベルトをカチャツと外し……あまりにも大きくなったソレを外に出した。

「っ！」

今までの人生で見たソレとは比べ物にならないほど、あまりにも大きくて…反り立っていた。私の反応を見て、こんなに大きくなったのだと思うと…拒絶してはいけないような気がした。

「それに気にならないか？指では届かないもつともつと奥まで薬を塗りこんだらどうなるか。」佐伯先生はチューブを搾り、自分のモノにゆっくり塗り込んで、私の乳首をコリコリと指先で弄った。

「ひあ…あ…あ…」

触れられるだけで身体がビクビクしてしまう…もしあんな薬を…先生のモノで奥まで仕込まれたら…

そんな想像をするだけで、身体は期待で震えた。

「イれていいなら、愛してあげるよ。壊れるまで。どうする？」

悪魔のような囁き…お腹の上で同じ振動を繰り返す電マ…

イきたい、もう身体は限界なの…

「佐伯…せんせ…」

「ん？」

「イれて…ください…奥まで塗って…」

（全容は製品版にて）